

葉桜やたたみて長き野点傘

(前田倫子)

傘の下で、茶を点てている内は気付かなかったが、傘を畳んだ時、こんなに長かったのかと仰天している作者。俳句は気付かなかったことを気付かせる妙味がある。縦と横の構図のトリックも面白い。

花曇タンカーの沈みさうに航く

(前田倫子)

鉄の船が水に浮かぶ不思議さ。ましてや石油などの重量物を運搬するタンカーである。世界恐慌を来した石油にも相俟ってなおさら、危うく沈みそうにみえてくるのも深読みだろうか

春霞をよけて女形のしぐさかな

(山本あかね)

歌舞伎を観に行ったときの句でしょう。女形の一瞬の仕草はぞくっとするほどの艶やかさ。女が男に色香を見習う。ここにも滑稽が潜んでいる。

春風が四角く通る大手門

(山本あかね)

柔らかい春風が厳しい城門を抜ける時、四角になってしまったと言う比喻。登城の武士のように風邪も緊張したのでしょうか。

渋柿や人間として六十年

(稲沢進一)

ご自分が無愛想なのか渋い顔をされ乍の六十年なのかいずれにしても人間なのだと主張している。案外こういう人は渋柿とっていて甘柿かも人の良さが見える滑稽を裏打ちさせて廻りまで想像が広がる。

尻の位置草より高く草引く女

(黒田忠一)

思わず吹き出した。横からの観察。膝が痛いんですよ黒田さん。人はこうして老いてゆく

私も然り。スタイルなんか構ってられない。

冷麦の赤一本の行きどころ

(有吉堅二)

「行きどころ」に誰が食べたのかなと微笑んでいる作者。冷麦には赤一本と緑一本が入っている。子どもたちの取り合いです。その赤一本の中七で和やかな家族が見えてくる。